第 184 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

『いたわり』の理解 ～ 時代に備える道 ～

2023 年 7 月 3 日 『いのちのことば社』出版部 砂原俊幸氏、めぐみ在宅クリニック 小澤竹俊先生と Zoom 会議である。 対談本を企画されるようである。

【日本は超高齢化社会に入り、2030 年には、3 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となります。それはとりもなおさず「多死社会」となることを意味します。労働人口は減り、社会保障は借金（国債）頼みで増えていく中で、安寧な終末期を迎えるのは難しくなっていくと予想されています。 本書では、終末期の在宅医療と心のケアに取り組む医師と、ガン患者の心の拠り所となるカフェを全国各地で主宰する医師のお 2 人による対談を通して、これからやってくる時代に備える道を探りたいと思います。】とある。 完成が楽しみである。

筆者は、『日本肝臓論』を提案している。 肝臓は、正常な時には分裂せず、静止状態にある。 しかしいざという時には再生能力抜群で、3分の2を切っても2週間で元通りになる。 異物に対しては寛容性をもつ。 また解毒代謝作用がある。 さらに血中を流れているたんぱくの80％は肝臓で作られていると言われている。 日本国も肝臓のような国になれば、世界から尊敬されるという趣旨である。 人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担と お互いの非連続性の中の連続性、そして、障害時における全体的な『いたわり』の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。

『医師の２つの使命』

（1）『学問的、科学的な責任』で、病気を診断・治療する

（2）『人間的な責任』で、手をさしのべる。

『医療の共同体：病気であっても、病人ではない社会構築』の5ヶ条

（1）『明晰な病理学的診断』

（2）『冷静な外科的処置』

（3）『知的な内科的診療』

（4）『人間力のある神経内科的ケア』

（5）『人間の身体に起こることは、人間社会でも起こる＝がん哲学』